

# 「五四」新文化運動と陳独秀

——中国近代文学の思想的基盤についての考察——

中 屋 敷 宏

## 新文化運動までの陳独秀

陳独秀の生家は、安徽省懷寧県の半農半読の中流という家柄である。父親が秀才となり、叔父も郷試に合格したことで、この地方で名を知られるようになったくらいの家である。<sup>(1)</sup> 父親は彼が生れると数ヶ月で死去しており、兄弟は兄一人、姉二人の四人であった。他に厳格な祖父が同居しており、彼はこの祖父の厳しい指導の下で育てられるのである。彼の父は奉天で武官として奉職した人であるが、<sup>(2)</sup> ついに科擧に及第することができなかったため、母親の教育方針は、「科擧を受験し、少くとも舉人になり、父親の無念をはらす」ということであり、彼も六才の時から祖父の下で「四書五経」「左伝」等の勉強を始める。独秀が自ら語る所によると彼は幼時から聡明であり、祖父の期待も大きく、それだけに教育のやり方も厳しかったそうである。この祖父が怒ると半狂乱になり、烈しく鞭打つのであるが、彼はそういう時にも一声も泣声を出したことはなかった、とも言っている。<sup>(4)</sup> この祖父は、彼が八九才の時に死去し、それから十二三才迄何人かの塾の教師について勉強するのであるが、彼はその誰にも満足せず、わずかに兄が教えてくれた「文選」に興味を覚えた程度であった。八股文そのものに興味を持てなかったのである。陳独秀の幼年時

代は、普通の読書人の家庭の子供と別に変った事はなかったようである。科挙を目標に、経書の勉強にはげんでいるのである。だが僅かに変った事と言えば、母親の強い希望であるにもかかわらず、彼が「科挙崇拜の思想」の影響を全く受けなかった事であろう。<sup>(6)</sup> 彼は科挙に合格して、将来大官として立身出世しようというよう士大夫階級の人生観を持つことはなかったのである。

十七才で県試、府試を経て院試に首席で合格して生員となる。十八才の時、江南郷試を受験するため、生れて初めて故郷を離れて、南京へ出る。ここで受験生達の腐敗しきった姿と行動を見て、彼は科挙と訣別することを決意するのである。集団で店の商品をくすねたり、それをとがめた商人を、逆に「皇帝の聖旨」でおどす受験生、真裸で自分の書いた文章を読み返しながら廊下を歩きまわる、まるで猿か何かの動物の姿を連想させるような、知性も気品もない受験生、これらの人間が志を得たとすれば、人民はどれ程の災厄を受けねばならぬか、と彼は考えるのである。そして国家の制度とはすべてこのような欠点があるだろうと連想する。そして最後に「梁啓超などの人が『時務報』で言っている事は、いくらか道理があると感じ」るのである。この経験が自分が康梁派へ転じた最大の動機であった、と彼は言っている。<sup>(6)</sup> この回想が当時の真実をどの程度伝えているかは問題であろうが、ここで最も注目されるのは、彼が変法派の機関紙「時務報」を読んでいたという事実である。南京より更に遠い片田舎に住む彼が、上海で発行される、それも危険思想視されている傾向の新聞を読めたというのは、余程の事である。彼の周辺には、田舎では考えられぬ程の開明的な空気が存在していたことが推測される。彼は後年康有為、梁啓超から大いに外国についての新知識を開かれたと述懐しているが、<sup>(7)</sup> この頃の事を言っているのであろう。この当時彼は既に田舎の読書人を抜く新知識の持主であったと思はれるのである。彼が一回の経験で簡単に科挙に見切りをつけ、また十八才で「揚子江形勢略論」という本を書いたりした底には、伝統思想とは異質の新知識による、新しい世界観の萌芽があったと考えられる。

一八九八年、十九才の陳独秀は杭州に行き求是書院に入学する。この学校は日清戦争後、知識人の間に起った開明の気運にのって設けられた新式の書院で、新知識を教へ、多くの革命的人材を輩出し、辛亥革命時期には杭州の革命の発源地になったと言われている。<sup>(9)</sup>この学校における陳独秀については、全く解っていないが、彼がここで初めて新教育、新思想の正式の洗礼を受けた事だけは確かである。しかし、この書院への在学期間は短く、翌年には母の喪で故郷に帰っている。それから数年間の陳独秀の行動や思想については、全く解らない。<sup>(10)</sup>しかし、中国の空気は大いに変わりつつあった。一八九八年九月には光緒帝の百日変法が完全な失敗に終り、康有為等は亡命する。そして孫中山指導の興中会による惠州起義も失敗するが、しかし、改革運動の主導権は「変法派」の手から、確実に排滿興漢の「革命派」の手に移りつつあった。郷里に帰り、常に「康梁派」を弁護して人々の非難をあびていた陳独秀も、この時代の流れを反映して一九〇〇年前後には、排滿の革命運動に身を投じたようである。<sup>(11)</sup>一九〇二年、潘普華等数人の友人と「新知識を広め、民智を啓蒙する」目的で、函書を買集めて、安慶城内に「蔵書樓」(一種の図書館)を開く。そしてここに学会を組織し、革命の宣伝を行うが、これはすぐに発覚し、地方政府によって、閉鎖されてしまう。<sup>(12)</sup>

この年彼は最初の日本留学をする。日本では留日学生の一種の親睦団体である「勵志会」に加入するが、この会は義和団事件、自立軍起義の失敗等と激変する情勢につれて、二つの派に割れていた。陳独秀はこの会に加入するやすぐに急進派の一員となり、留日学生の新組織「青年会」の組織には発起人の一人として積極的に参与している。<sup>(13)</sup>この「青年会」は「民族主義を以て宗旨と為し、破壊主義を目的と為す」という明確な革命の目標をかかげた、留日学生の間における最も初期の革命団体であり、後にはそこから多くの革命的人材を輩出することになるものである。陳独秀はこの会の中心人物の一人として、この頃はすっかり革命運動の中に身を投じていたのである。この「青年会」は、義和団事件に際して出兵した帝政ロシアの軍隊が、東北地区を占領したまま退かぬことに憤激して、「拒俄義勇

隊」を組織し、ロシア軍と決戦することを図ったりするが、袁世凱の圧迫で実現に到らず、これを「国民教育会」に改組して長期抗戦の姿勢をとっている。陳独秀の革命家としての記念すべき第一声は、この「青年会」の政治姿勢を実行に移したものであった。

一九〇三年五月二十一日、陳独秀は潘普華、潘璇華、王国楨等の同志とあの安慶城内に設けた蔵書楼で「拒俄演説大会」を開く。この大会は陳独秀にとっては革命家としての公式な最初の活動であったが、安慶にとっても革命運動の第一声であった。これは非常な反響を呼ぶのである。陳独秀は「拒俄大会」を開くに先立って、日本留学からは日本警察の捜査を避けて帰国している。日頃から学生の怨みを買っていた東京の南京留学生監督姚焯の辯髪を、家に押し入った陳独秀、鄒容、張繼等五人の学生が切り落とすという事件が起り、陳独秀等は日本の警察の捜査を受ける身となったからである。<sup>(55)</sup>「拒俄大会」は、当日は大雨であるにもかかわらず三百名内外の人が集まり、陳独秀が開会の辞を述べ、二十数名の演説が続いた後、陳独秀の發議により「愛国会」の結成と「愛国新報」の創刊とが決議される。

この「愛国新報」発刊の布告には、国民同盟会を創って南方が独立し、異民族の支配を受けない、という民族主義による国家再建の構想が述べられている。<sup>(56)</sup>この大会における陳独秀の演説は、彼のこの当時の思想意識を知る上での貴重な資料である。<sup>(57)</sup>

陳独秀はまずロシアが中国に締結を要求している条約の内容が、「横暴無礼」である所以を、七ヶ条にわたって論じ、続いて自分が見た東北三省における中国人が、ロシア人から受けている虐待の様子を述べる。そして列国もこれにならって中国を分割しようとしており、中国は亡国を目前にした危機的情況にあることを訴える。にもかかわらず中国人は、この危機を冷淡に眺めるだけで立上って国家を救おうともしない。一体どうしてこういうことになるのか。陳独秀はその原因は、中国人の民族性にあるとして次のように言う。「思うに中国人の性質は、ただ生死を争うだけ

であり、榮辱を争はない。ただ世上に偷生苟安を求めただけで、滅国し奴隸となるも、皆甘んじてこれを受ける。外人の性質は、ただ榮辱のみを争い、生死を争はない。寧ろ国民のために死しても、奴隸となって生きない。」このように中国の民族性の病いを剔抉し、続けてこれを矯正する方法を、情報、思想、体魄の三つにわたって論じている。彼の主張している事は、国民に情勢についての情報を速かに知らせること、国民は愛国心を持ち、商業、軍事における戦いに敗れないような強い精神と肉体を持たねばならぬ、ということである。そして最後にくり返し亡国を座視する民族の精神構造を四つのタイプに分けて論じ、愛国心の発達する精神的基盤のないことを慷慨して終っている。この演説は、情勢を鋭敏に感受した切迫した危機意識に貫かれているが、悲観的な慷慨のトーンもその著しい特徴をなしている。民族の当面する危機への認識の鋭さが、民族性への怒り、慨嘆の烈しさへと転じているのである。このような陳独秀の思考の中に、我々は「五四」文化運動における彼の重要なテーマが、既に形成されていることに注目せねばならないであろう。

陳独秀等の革命運動は当局の注目する所となり、蔵書楼は閉鎖されただけではなく、指導者である陳独秀は警察当局から逮捕状を出されて、追われる身となる。そこで彼は逮捕を逃れて上海へ出る。上海ではこの年七月、「蘇報」事件が起り、「蘇報」は停刊をよぎなくされていたが、陳独秀は章士釗とともに「国民日報」を創刊し、「蘇報」の意志を継承していく。この「国民日報」は、排滿興漢の民族革命を主張する点では「蘇報」と同じであったが、「特に滿清政府の腐敗の暴露と社会上の様々な不満の報道を登載するのを喜んだ」と言われている。そのような主旨のためである。陳独秀は蘇曼殊とともに、ユーゴーの「レ・ミゼラブル」を「惨社会」の名で翻訳し、その一部をこの新聞に掲載している。陳独秀の翻訳は原文に忠実であるよりも、読む者を驚嘆させるほど、その人物描写が刻薄であった、と言われている。この「国民日報」も当局が購売を禁止するなどの消極的な弾圧策をとったので、前後四ヶ

月ばかりで停刊する。その後暫く上海に留っていた陳独秀は、「慘社会」を単行本として出版している。

一九〇四年の初め頃、二十五才の陳独秀は蕪湖に帰り安徽公学の教員となる。安徽公学の前身は、李光燾が革命的人材を養成する目的で湖南に創設した旅湘公学であり、悪劣な環境の下で続けられなくなったので、蕪湖に移り安徽公学と改称したものである。<sup>23)</sup> 招聘された教員は当時の著名な革命運動家と日本留学生であり、蘇曼殊、柏文蔚、陶成章、張伯純、劉師培等がいた。<sup>23)</sup> 蕪湖に帰った陳独秀は、一九〇四年一月「安徽俗話報」を創刊する。革命的内容の白話の新聞を出すというのは、一九〇三年頃から全国的に出てきた傾向で、一九〇五年までに全国で出されたものは六七種類もある程である。<sup>23)</sup> 陳独秀の新聞もこのような全国的な革命の潮流の一環をなすものであった。新聞の内容は反清革命の宣伝とともに、資本主義列強の安徽礦山掠奪を暴露するなど反帝的要素を持つものであった。<sup>24)</sup> この新聞には、日露戦争の進行状態や列強の中国分割の意図など、毎号読者の政治意識を啓発する内容のものを載せ、外には自由民主、男女平等、自由結婚、迷信打破、実業振興などの新知識、新思想の啓蒙を内容とするものも載せている。この新聞の反響は大きなものがあり、僅か半年で数千部の発行部数となっている。しかし、英国の駐蕪領事の当局に対する圧迫によって一九〇五年八月、停刊する。<sup>24)</sup> この新聞の発行は中国人の民族性を改革するためには、情報、思想が必要であるとする陳独秀の信念を実行にし移たものであったと思われる。

陳独秀が安徽公学において行ったもう一つの重要な革命運動に、「岳王会」の組織がある。「岳王会」の成立は一九〇五年の初であるが、この前に陳独秀は暗殺を手段とする革命団体「愛国協会」に加入している。章士釗、楊篤生、蔡元培、蔡鍔、劉師培、陶成章、張継等の名が見える団体であるが、この団体の活動として陳独秀は上海に逗留して爆弾製造を行っているが、はかばかしい成果をあげることもなく終っている。<sup>25)</sup> 革命運動の大勢は、暗殺を手段とするテロの時代から、組織活動の時代へと移っていく。蕪湖へ帰った独秀は栢文蔚等と「岳王会」の組織にとりかかる

のである。この会は岳飛の「精忠報国」の精神にもとづいて組織された軍事活動を軸とする秘密結社である。会長陳独秀の下に組織された人員は、安徽公学教員、学生、安徽武備練軍学生、新軍中下級軍官及び警察学堂の学生など三十数人であった。<sup>27)</sup> 陳独秀はそれから組織者としての精力的活動を展開している。そして安徽省の多くの革命人士を糾合することに成功する。<sup>28)</sup> 「岳王会」は程なく安慶、南京にも支部を組織し、新軍兵士の間に大きな影響力を及ぼすまでに生長する。こうして安徽省における革命勢力の中心となるのである。<sup>29)</sup> 「岳王会」を軸にして武装起義の力量が、かなりの程度蓄積されていた頃、光復会徐錫麟による武装蜂起の失敗という事件が起る。徐錫麟は安徽と南京の黨員、新軍に連絡をとり、各地で響應して事を起す予定であったが、安徽省巡撫恩銘を殺しただけでもろくも失敗するという事件である。この事件に「岳王会」がどう関係していたかは、現在の所不明であるが、その後に来た弾圧のため「岳王会」の指導者も追われる身となり、陳独秀は日本へ亡命する。<sup>30)</sup> 三度目の渡日である。(前年にも一度日本に遊んでいる) 一九〇四年の初めから一九〇七年の五月末までの安徽公学における期間が、陳独秀が革命家として最も精力的に活動した時期であったと言えよう。この時代に書かれた彼の文章は読む術はないから、その思想は正確には解らないが、各地方独自に排滿興漢の武装蜂起を組織するという時代の潮流からは、大きくはずれることはなかったと推測される。このような梓組の中で「安徽白話報」に見られたように、国民に情報を与え、新知識、新思想を宣伝して国民の精神を啓蒙するという姿勢だけは保持し続けていたのである。

今回の留学は二年余りになる。<sup>31)</sup> その間劉師培、章太炎、蘇曼殊等数人の人々とは親密に往来しているが、彼は革命運動よりむしろ学問の方に専念している。中国伝統の学問<sup>32)</sup>と西欧新思想の研究に専念し、後の「新青年」における文化運動の基礎を作ったと思われる。<sup>33)</sup> 一九〇九年十月長兄死去のため、陳独秀は瀋陽を経て郷里に帰る。そしてこの年の冬から杭州陸軍小学校で歴史地理の教官となる。<sup>34)</sup> この間の事情はよく解っていない。しかし一九一一年十月の武昌

起義においては、陳独秀は多数の革命檄文を書いている。これから暫くの間の、彼の行動もよく解らないが、都督孫毓筠の秘書職をした、或いは翌年五月に孫が栢文蔚と交代した時に、陳は秘書長に任じられた等の説があるが、確かではない。この頃安慶高等学校の教務長の職をしたのは確かである。

一九一三年三月、袁世凱は国民党の領袖宋教仁を暗殺する。袁世凱の共和制に敵対し、帝政復活を図る野望は誰の目にも明かになりつつあった。そこで安徽省都督栢文蔚は、このような袁世凱に対抗する準備を進める。陳独秀はこの仕事の助手として秘書に任命され、安徽省の民政の代行をまかせられる。その間栢文蔚は上海で孫中山と討袁の大计を定めて帰ってくるが、安徽省革命勢力の分裂によって実行に移されず、逆に革命勢力は袁世凱によって買収、暗殺等の手段で各個撃破されてしまい、六月には栢文蔚までが免職されてしまうのである。それにつれて陳独秀も辞職し、上海へ出る。袁世凱に追いつめられた革命派は、ついに第二革命に起ったが、この時陳独秀は安徽に帰り都督も兼ねている栢文蔚の秘書長として、討袁の戦いに参加する。しかし、この戦いも実にあっけなく敗れ去る。敗れた革命軍の安徽省の重要人物として、指名手配の第一位にランクされた陳独秀は、再度上海へと亡命するのである。

上海では「字義類例」一書を書きあげ、翌一七年の夏に四度目の日本留学をする。日本ではアテネ・フランセで勉強しつつ、「甲寅雑誌」の編輯の仕事を行う。また東京に亡命している反孫文派が組織した欧事研究会に参加し、討袁工作も継続している。袁世凱が日本の「二十一ヶ条」を承認するに到って、この年の十月彼はやむにやまらず偕冷通、鈕永鍵、章士釗等と前後して上海に帰ってくる。積極的に倒袁工作を進めるためである。その気持が「青年雑誌」(すぐに「新青年」と改名、以後「新青年」に呼称を統一する。)の創刊へとつながるのである。

一九〇七年以後は革命運動の第一線を退いた感はあるが、しかし、これまで陳独秀は一貫して革命家として生きてきている。西欧列強からの国土分割を甘んじて受け、亡国の瀬戸際にある祖国を憂へ、その再生のために懸命になっ

て旧体制と闘い、旧体制を支える人民の精神と闘い続けてきたのである。だがその志は成就せず、無残な敗北に終らざるをえなかった。だが彼は「文化運動」を以て、再びこの課題と立向おうとしているのである。陳独秀は、なぜこのような選択をしたのであろうか。このような選択を支えた意識と思想とは一体どのようなものであつたらうか。輝かしい新文化運動の旗手としての陳独秀を扱う前に、我々はまずこの問題から考察していかねばならない。

### 啓蒙の意識と論理

新文化運動を始める直前の陳独秀について知りうる、今日残されている資料は、彼が第二革命が敗れて後に雑誌「甲寅」に書いた二つの文章——「生機」と「愛國心と自覚心」——だけである。この二つの文章はともに濃厚なペシミズムに覆われている。辛亥革命の成果が袁世凱によつて篡奪されていくという事態の推移に対して、知識人達の間には深い絶望感が支配しており、陳独秀もこの時代の雰囲気にとらわれているのである。「国人の唯一の希望は、外人の分割のみ」<sup>(1)</sup>という言葉には、この時代の知識人の絶望感を凝縮した感すらある。辛亥革命の挫折は、陳独秀にとつては中国の自力による再生の可能性を断念させる程の大きな衝撃であつたのである。この陳独秀の絶望の本体をさぐつていくと、我々はそこに、あの青年陳独秀の革命家としての第一声のテーマであつた「中国民族の精神」というテーマが、再びその絶望のトーンを濃くしながら、甦えつついるのを見出すのである。「愛國心と自覚心」<sup>(2)</sup>では陳独秀は、国民の権利を保障し、共に幸福を謀るといふ国家本来の目的をはたさないような国家の亡国は、何ら憂うに足りないという大胆な論を展開している。彼は言う。国家の本来の目的を見失い、愛するに値しない国家に対して、「愛國の膚見を執つて、虐民の残体を衛る」が如きは「愚に非ざれば即ち狂」であると。だから列強の分割にさらされ、亡国の危機に瀕している、現在の中国の国家の滅亡など何ら憂うるに足りない、と彼は言うのである。

この論文は李大釗と比較されている／＼と批判にさらされているが、表面の論旨から彼に愛国心が欠如していたなど結論することは早計である。陳独秀の真意が、真の意味での愛国心を排斥することや、国家の滅亡を歓迎する所になかったことは明かである。彼にとって真に問題であったのは、愛するに価する内容を持った国家を建設する事、そのための「国民の智力」に「自覚心」を生み出す事であった。彼の「絶望」はここに根ざしている。国民の「自覚心」が全く欠如した上でなされる様々な政治的な改革、それ等は決して国家を強化することにならないし、中国の亡国を救うことにもならぬ、ただ「虐民」の上にそびえ立つ旧体制を再生産するに過ぎないのである。辛亥革命の挫折という苦い歴史的体験から導き出した陳独秀の結論は、以上のようなものであったと考えられる。この結論は、言うまでもなく彼を革命運動の第一線からは、退けるように働く。そして、それがもと／＼彼自身にあった文筆で生計を立てていこうという個人的な生活への配慮と合体した所で、「新文化運動」の創造という構想が生れたとしても不思議ではない。「新青年」の創刊とは、このようなものであったのである。従って、これは本質的には彼自身の革命運動の継続であり、列強の中国分割から祖国を守り、祖国の亡国を防がねばならぬという、あの青年陳独秀の志の持続であったのである。

以上のような問題意識で始められた文化運動であるから、そのテーマは自ら明かである。その狙いは「中華民族の精神の改造」という所にびたりと定められている。そして「中華民族の精神の改造」という事は、彼にあっては西欧民族の持つすさまじいエネルギー、烈しい自己主張、闘争心というダイナミックな性格に見習うことであった。西欧人のすさまじいまでに強烈な性格に対して、中国人の持つ協調性、虚飾性、非実用性といったあまりにも消極的すぎる性格、そこに彼は西欧の「富強」と中国の「積弱」という現象の人的基礎を見るのである。中国人の民族性は改造しなければならぬ、そうしなければ中国は決して世界の列強に伍して国際世界で生きていくことはできない。こう

して彼の全面欧化という思想的課題は設定されるのである。「東西民族の根本思想の相異<sup>(5)</sup>」という論文は、そのようなテーマを論じたものとして読むことができる。彼はこの論文で、東西民族の相異を①西洋民族は戦争を以て本分とし、東洋民族は安息を以て本分とする。②西洋民族は個人を以て単位とし、東洋民族は家族を以て単位とする。③西洋民族は法治を以て本分とし、実利を以て本分とし、東洋民族は感情を以て本分とし、虚飾を以て本分とする、という三項目にまとめている。そして「戦争」「個人」「実利」「法治」という西洋民族の現実主義的、個人主義的な、戦闘的な性格にいたく感心し、中国人の平和的、家族主義的、消極的な性格は全面的に否定しなければならぬと主張しているのである。この中国の民族性に対する陳独秀の否定の情熱の激しさには、目を見はるものがある。彼は別の論文<sup>(6)</sup>では、中国民族はまずその「心血を一新」し、「民族性を更新」してこそ始めて「白人種と応待する価値があるのであり、我々はこの大地の一隅に生きる資格を持つのである」とまで言っている。

民族性の問題は、しかしながら陳独秀にとって、民族の精神という次元に完結する性質のものではなかった。彼は民族性の背後に、より根源的にそれを生みだしている社会体制を見るのである。民族性は社会体制を支えるものであるが、他方ではそれによって生みだされるという関係にもある。即ち西欧人のダイナミックな性格の背後にあるのは、「あげてすべての倫理、道徳、法律、社会の向う所、国家の求める所は、個人の自由、権利と幸福を擁護するのみ<sup>(7)</sup>」という政治体制である。それは「人民を主人」とする「真の国家<sup>(8)</sup>」である。これに対して中国の「人民」のあり方は違っている。彼はそれについては次のように言う。

封建時代、君主専制時代の人民は、ただ支配者の命令に従うだけであり、相互の連絡の機縁がなく、だから団体思想は薄弱である。この種の散砂のような国民は、これを国際的生存競争の渦の中に投ずれば、国家の衰亡は、占  
 いの結果を待たずしても明かなことである。<sup>(9)</sup>

このような論理において、「民族性の改造」という課題は、政治社会体制の改革という課題へと転化する。それは人民の自由、権利、幸福の擁護を目的とする国家の創造、即ち立憲共和制の確立という政治的課題と同一の事となるのである。そこでストレートに政治運動や政治的プロパガンダの世界に乗り出すことについては、陳独秀は厳しく自制しているが、「民族性の改造」という課題を、少くともそのような政治体制を生みだすための思想、自由、権利、平等等の西欧デモクラシー思想の徹底化として受取った事は確かである。中国人の精神を支配している封建的、儒教的イデオロギーを一掃し、それ等を西欧近代思想によって置き変える事、これこそが中国人の精神の改革<sup>11</sup>民族性の改造であること陳独秀は考えているのである。このような立場からする陳独秀の儒教イデオロギーに対する闘いには徹底したものがあつた。陳独秀における啓蒙の課題とは以上のようなものであつた。それは西欧近代思想の紹介、宣伝と中国封建イデオロギーに対する徹底した批判とを主たる内容とし、ほぼこれにつぎると言つてもいいものであつたのである。

このような啓蒙の課題は、陳独秀の言葉を借りれば「デモクラシー」の主張であるが、彼の啓蒙思想の体系にはもう一本の柱があつた。「サイエンス」である。この「サイエンス」は、上述したような啓蒙思想の主張に対して確固たる科学的根拠を与えるものであつたと言へる。それは啓蒙思想の主張に科学的必然性と人類的普遍性という「正当性」を与える役割をはたしているのである。陳独秀の言う「サイエンス」とは、具体的には進化論であつた。陳独秀は生物学上の進化論が教える「自然淘汰」「生存競争」「適者生存」の法則を、人類を含めた生物世界における普遍的法則として受取る。例えば「陳腐老朽した者は、自然淘汰の道にあらざるはなく、新鮮活潑なる者には、空間の位置、時間の生命が与えられる」<sup>12</sup>というように具合にである。敵復によるハクスレーの「進化と倫理」の翻訳によつて、中国には始めて「進化論」が紹介されるのであるが、この時の敵復の受けとり方は、人間世界の独自の性格を人

「倫的努力にあると説くハクスレーの意図とは反対に、全くこれを競争的世界観として解釈するものであった。<sup>12)</sup> 陳独秀も、「進化論」のこの敵復的解釈の上に立つものであったのである。

そしてこの競争的世界観としての「進化論」は、陳独秀においては、全く無媒介的に社会現象の上にも適用される。人類史そのものが、社会ダーヴィニズムの立場から解釈されるのである。次のような具合にである。

専制政治より自由政治に趨き、個人政治より国民政治に趨き、官僚政治より自治政治に趨く、これは所謂立憲の潮流であり、所謂世界の系統的発展の道筋である。我国は既に門を閉ざして自守することができなければ、絶対にこの道筋を越え、この潮流に逆うの理はない。(中略)

我国は世界的生存を図らんと欲するのであれば、必ず数千年間伝えられた官僚的、専制的、個人的政治を棄てて、以て自由的、自治的、国民的政治に替えねばならない。<sup>13)</sup>

こうして「デモクラシー」という陳独秀の政治的、思想的な主張は、「サイエンス」によって、世界史的必然性の上に立つ、人類の正当性を持った主張として根拠づけられるのである。こうして「啓蒙思想」の論理は完結する。それは自らの自由、平等、権利といった西欧的デモクラシーの思想を、進化論的世界観によって人類史的普遍性の域にまで高めた。この事によって「政治運動」は、党派闘争の世界を超えて、人類の普遍性にまで高まることができた。しかし、この「デモクラシー」と「サイエンス」を軸とする啓蒙思想の論理によれば、あらゆる国家、あらゆる民族はすべて、同一の進化の道を歩まねばならないことになる。人類史的進化の必然として、それ以外の道は存在しないからである。陳独秀は深くその事を信じていたのである。中国が国家を強化し、民族の再生を図るには、立憲共和の国家体制を築き、国民が主権者としての真の自覚を持つ以外には道はないと。このように、西欧近代啓蒙思想の論理の完全な虜になった事に、その後の陳独秀の栄光と悲惨を生み出す、すべての根源があったと言うことができよう。

## 啓蒙的論理の機能

陳独秀の雑誌「新青年」による「新文化運動」の開始は、中国近代史に一つの転機を画する画期的な事件となった。その新鮮な論調は、辛亥革命以後も相変わらず社会を覆っている暗い封建的な雰囲気の中で、絶望感をつのらせていた青年、知識人達には大きな衝撃を与えたのである。その力強い、確信にあふれた宣言は、人々に中国と自己の歩むべき道をさし示し、その苛責なき、徹底した旧体制と儒教イデオロギーの批判は、大きな勇気を与えるものであった。当時のある青年のグループが、「新青年」の編集部に「△新青年▽」を讀んでから次第に目覚めてきました。本当に暗夜に曙光を見たような気持です<sup>(1)</sup>と書き送ったのは、決して誇張ではなく、当時の知識人層の気持を最も忠実に代弁していたと思はれるのである。「新青年」の個人の権利と幸福という「あるべき人間」の姿を実現する、自由、平等、立憲共和制の、人間社会としての、「あるべき体制」を創造しようという力強い主張は、人々の心を大きな力をもって圧倒していったのである。そして非妥協的に中国封建隊伍と闘う人々の隊伍をも生み出していった。巴金の長篇小説「家」の中の次のような描写は、当時における「新青年」の圧倒的な影響力を如実に伝えている。

このとき、五四運動が勃発した。新聞紙上の煽動的な記事が、彼の忘れていた青春を呼び醒ました。彼は彼の二人の弟と同様、土地の新聞に転載された北京のニースや上海の六三運動(六月三日、五四運動のうんがさ、上海に労働者商人を多く含む民衆大会がもたら、全面的なストライキに入る。)の記事をむさぼり読んだ。土地の新聞にはまた「新青年」や「毎週評論」の中の文章が転載された。彼はこの城内でただ一軒の新刊書を売る店で、最近出版された「新青年」一冊と二三冊の「毎週評論」とを買いもとめた。その中の一字一句が、火花のように彼ら兄弟の情熱を燃え立たせた。それらの斬新な議論や熱烈な文章は、大きな力で彼

ら三人を圧倒して、考える余地とてなく、たちまち彼らを信服させたのであった。<sup>(2)</sup>

これは、かつては新思想に心服していたが、今は「家」の重圧に押しひしがれている長兄が、五四運動に刺戟されて学生である二人の弟と一緒に、「新青年」を読む部分である。

この巴金の描写は、その当時における「新青年」の姿を生々と伝えている。それは青年達に生きるための大きな理想と目標を与え、周囲の封建制と非妥協的に闘う勇気を与え続けたのである。中国の民主々義革命の中ではたした、「新青年」の歴史的功績は、決して抹殺できるものではないのである。

しかしながら、陳独秀の啓蒙の限界が露呈してくるのもまた早かった。彼の説く「あるべき社会」、人類史の必然の道に添った「あるべき社会」を、どのようにして、具体的に建設していくのか、このような段階の問題となると彼の啓蒙の論理は、無力さを暴露せざるを得なかったのである。そのような例は、康有為との「共和制論争」に見ることができる。康有為はその立場からして「民主共和制」の実行が不可能であることを力説する。その理由として、軍人の専制、鉄道の開通、銀行の政府の売国的行為に対する支援の存在、といった現実的、具体的な理由をあげる。これに対して陳独秀の反論は、「真の共和の実行を希望してこそ、始めてこれら(辛亥革命後にあらわれた政治上の諸弊害—中屋敷注)を救うことができる」という本末を転倒したものであったのである。陳独秀が現実の具体的な問題を論じると、いつもこの種の空論に終るのである。彼が国家民族の存亡にかかわる政治の根本問題だとして出してきた、中国の政治の基本方針というの、次に見るように観念的なものであった。①武力政治を排斥すべきである。②一党の勢力を抛棄して国家の思想を統一すべきである。③保守か革新かの国是を決定すべきである。<sup>(6)</sup> 国是を定めるといふのは康有為の模倣である。その言うことには全く新味も、具体性もないのである。

具体的に「どのように」実行するのか、という方法を論じる段階で、彼は「こうあらねばならぬ」という理想論を

論じる。つまり陳独秀の論理は、現実性を欠如しているのである。それは啓蒙思想の論理そのものに内在する限界であった、と考えられる。このような限界は、彼が中国における「人民の闘争」を論じる時に、より明かになるのである。

このような例は、まず陳独秀が「義和団」を論じた時に見ることができる。彼が義和団事件に対して言った次の言葉は印象的である。

現在世界には二つの道がある。一つは共和的、科学的、無神的なものに向う光明の道であり、一つは専制的、迷信的、神権的なものへ向う暗黒の道である。<sup>(6)</sup>

彼は義和団は、中国における「専制的、迷信的、神権的」な「暗黒の道」へ向う勢力を代表するもの、として全面的に否定する。中国は世界に対して再びくり返してはならぬ、恥ずべき事件であるとするのである。<sup>(7)</sup> 義和団の持つ反帝闘争としての意味については、全く気がついていないし、少しの評価もしないのである。同様な例は五四運動の評価についても言うことができる。彼は五四運動における、学生を中心とした日本商品排斥運動についても、これは「人類の進化史上、やはり暗黒の運動であって、光明の運動ではない」と言う。<sup>(8)</sup> それは排外主義を事とする悪しき愛国主義にもとづくものであるから、人類を分裂させる。従って好ましい運動ではないのである。彼にとって運動とは、人道主義、公理主義の上に全人類を合一させるようなものでなければならぬが、五四運動は明らかにこれに反するものであるのだ。<sup>(9)</sup>

義和団や五四運動に対する陳独秀の態度を通して、我々が注目せねばならないのは、人民の解放を求める行動についての彼の無感覚という現象である。義和団は迷信的な土俗宗教を核にして結集してはいるが、それは帝国主義諸国の侵略と収奪に対する中国人民の怒りの爆発であった。<sup>(10)</sup> 中国人民が陳独秀の説くような国家を創造するためには、帝

国主義国の侵略を撃退し、中国が真の独立した主権国家となることは不可欠の条件であり、そのためには義和団が示したような反帝闘争は、中国人民の避くべからざる闘いの過程であったのである。しかし、陳独秀には土俗的迷信という「遅れた」形態をとって展開されるものではあるが、その中にこめられた帝国主義と闘うことによって「解放」を求めるといふ、人民の気持が全く見えていないのである。また五四運動が日本の無法な侵略に対する民族的抵抗である、というその基本的性格も見えていない。そのことによって陳独秀は、彼の主観的意図はどうかあれ、民族の自由と解放を求めて闘う、人民の「反帝闘争」に対して、敵対する立場に立つことになっているのである。

西欧資本主義諸国の中国侵略に憤激し、民族の滅亡と亡国を憂えて革命家としての道を歩んできた陳独秀が、事志と反して、反帝闘争に敵対する思想家となったのは、一体如何なる理由によるものであろうか。そこに近代西欧を誕生の地とする、啓蒙思想の論理を持つ、恐るべき魔力という問題が伏在しているのである。一方では中国近代史に一時時代を画する輝かしい役割をはたしつつ、他方では中国的現実への無力を暴露しつつ、ついには「反帝」的視点を欠落させることによって、一種の「買弁」的思想に墮せざるを得なかった陳独秀の啓蒙思想、このような啓蒙思想の「機能」の総体を、我々はこの「論理」が生みだす、人間の意識構造の問題として、次に考察していかねばならない。

### 啓蒙思想家の意識構造

近代啓蒙思想の特質は、何よりもその掲げるスローガンの標語である人権、自由、平等、博愛等の言葉によく表されている。それは歴史を、自由、平等などをその中に含む、人間が先天的に持つ「人権」なるものの実現の過程としてとらえる。この思想においては、歴史の使命は「人権」なるものの実現にあると考えられている。<sup>(1)</sup>そして歴史の発展は、身分的拘束の時代から自由の時代へ、差別の時代から人間の平等の時代へという具合に、抽象的観念のレベル

で、普遍人類のなものととしてとらえられるのである。所で問題は、このような思想の論理にとらえられた人間の意識構造である。このような思想の論理にとられた人間が、自己及び自己の属する国家を、「普遍の人類」のレベルで表象するようになるというのは、思想の論理がもたらす一つの必然的な結果である。「自己」は、その属する国籍や階級を超えて、「普遍の人類」の一員として自覚され、「国家」は植民地宗主国と植民地、半植民地という現実の関係を捨象した所で、「人類社会」を構成する一単位として観念される。つまり「自己」や「国家」は、現実の歴史的、社会的条件によって制限を受け、独自の構造を持って存在している、その存在の具体性においてではなく、その存在の抽象性において、つまり「人間」や「国家」という単なる共通性、一般性において認識されるのである。彼は意識の世界においては、あらゆる現実的制限を超えて、普遍の人類社会の一員としての「コスモポリタン」へと上昇していくのである。

陳独秀の思想家としての栄光と悲惨は、上述したような啓蒙思想の論理として、その総体を把握することができるであろう。彼の栄光は、彼が「あるべき人類社会」の一員として振舞うことによってもたらされた。あるべき輝かしい「理想」の提唱と苛責なき現実批判は、中国を「あるべき人類社会」にまで高めようという彼の情熱がもたらしたものであった。だがしかし、中国における現実の具体的な問題に当面する毎に、彼が空疎な観念論に後退しなければならなかったのも、やはり啓蒙思想の論理がもたらす必然的帰結であった。即ち抽象性における「普遍の人類社会」という認識は、前述したように、人間や国家の歴史的、社会的な「存在の具体性」への認識を捨象した所で成立したものであったので、啓蒙思想家としての陳独秀は、現実の政治や経済については、全く認識の方法を持たなかったのである。歴史や現実社会の現象についての認識の方法を欠落させた陳独秀が、中国の具体的な政治改革に論及せねばならなくなった時に、一般論や理想論に後退していったというのは、やむを得ない事ではあるが、やはり一つの必然で

あった。

就中、彼にとって致命的であったのは、半植民地中国という現実認識を欠いていた事である。先に義和団を論じた時に引用したように彼は、人類史の発展の二つの方向を論じて義和団の闘いを断罪したのであった。啓蒙思想の歴史理論によれば、これ以外に人類史の発展の道はないという事になるであろう。しかしながら、植民地、半植民地諸国においては、資本主義宗主国が歩んだ道と同一の道を歩くことはできない。それ等の諸国が「開明」の道へと歩くためには、まず国家的独立を獲得し、資本主義宗主国からの政治的抑圧と経済的収奪から自由にならなければならない。その過程で資本主義宗主国に対する民族解放闘争は不可欠であるが、この時には人民の知的、文化的レベルに応じて「土俗的」なものも最大限動員されねばならないであろう。この闘いは現象的には、非常に「遅れた」形をとることが多い。そして所謂「ヒューマニズム」が教えるような友好的、平和的な形をとる事もない。しかし、これは最も先進的で、人間的な課題を荷うものである。この歴史のパラドックスが陳独秀には解けていないのである。陳独秀がこの課題を解くためには、半植民地中国が置かれている世界的構造を認識することが必要であった。世界を抽象的な単位国家の集合としてではなく、収奪と被収奪、抑圧と被抑圧という「階級的」重層構造を持って存在しているものとして認識する事が必要であったのである。だが、彼が啓蒙思想の論理にとらえられている限り、そのような事は不可能であった。そして彼がこの立場に立つ限り、半植民地中国における「人民」の反帝闘争と敵対するようになるのも、言わば必然であった。

「人類的普遍性」のレベルで構成された啓蒙思想の論理が、半植民地中国における思想家としての陳独秀にもたらした最大の陥穽はこの点にあった。熱烈なる愛国心と中国人民に対する厳しい責任感を、その思想的営為を導く支えとしてきた陳独秀が、「買弁的」とも思える言動をしたのは、この論理の陥穽に足をとられたからである。啓蒙思想

の論理は、ヨーロッパ世界の歴史的経験を独自の「抽象性」のレベルで構成し、これを「人類的」なものとして主張している。しかし、これがヨーロッパ社会を支えているアジア・アフリカの諸国民を、その視野から欠落させたヨーロッパ中心の世界観であることは、言うまでもない事である。従って、半植民地の人民がこの思想の論理にとらわれる事は、彼自らのヨーロッパ的世界観に対する屈服を意味する。思想的論理の世界で、従って自己の意識の世界で、真の意味での自己の当面する問題を見失う事を意味するのである。思想の論理の呪縛とはこのようなものである。陳独秀は、この思想の論理の持つ呪縛を破れなかつたのである。啓蒙思想にとらわれる余り、ついに半植民地中国における自己の存在を意識化することが出来ず、その結果が中国人民の「反帝闘争」への敵対であつたのである。

しかし、人間には現実の生活過程における諸経験によって、自己の観念世界を变革していくという道も残されている。体験を思想化していくという道である。しかし、このことが可能となるためには、豊富な体験、鋭い感受性ととも、個人の、世界に向って開かれた開放的な自我構造を必要とするであろう。少くとも現実に対する生活人としての人間の態度は保持し続けねばならないのである。だが陳独秀の自我は、このような可能性をすら全く閉ざす構造のものであつたと考えられる。彼の自我は現実に対して開かれているよりも、むしろ自己の「信念」の世界に完結する性質のものであつたからである。ここで陳独秀が行つた康有為との論争や義和団に対する評価を思い起してみるとよいであろう。陳独秀は、これ等の事件から問題を吸いあげようとするよりは、自己の描く観念の図式によって断罪することにのみ急であつた。彼には強固な「信念」があり、それに副はないものには断固として断罪していくという自信があつたのである。だがそのことは言いかえるならば現実の生々しい問題は、彼の強固なる「信念」を核とする自己の壁に阻まれて、彼の意識の内部にまで達することができなかつたという事でもある。彼の「信念」は現実の諸問題を感じ、吸収する障害となつているのである。「信念」を核として形成された彼の自我意識の壁は、これ程厚かつ

たと言えよう。

所で陳独秀の自我を構成する核となっている「信念」の内実は、言うまでもなく啓蒙思想の論理である。啓蒙思想の論理は、前述したように、もと／＼現実に対する積極的な意識関係を造出していく方法を欠いていた。それは現実のヨーロッパ史から抽象した一種の観念的な図式で形成された世界であったのである。観念的な図式を核として形成された自我の世界は、その当然の論理的帰結として、現実社会とは相対的に遊離した位相に立ち、自己自身に完結していく傾向を持つであろう。陳独秀の自我意識とは、このような意味における啓蒙思想の論理に忠実な自我意識の構造を示しているのである。そしてこの自我意識の完結性が、また彼自身が中国における思想家として、西欧近代啓蒙思想の限界を超えていく可能性を、主体の側から閉ざしているのである。これからすぐ後に陳独秀は「マルクス主義者」に「転向」するが、この時にも彼は啓蒙思想の論理によって形成された自我の構造は、このまま継承していると思われる。「信念」の内容を「啓蒙思想」から「マルクス主義」にとり代えはしたが、やはり彼の自我意識の世界は「信念」に完結していたのである。<sup>(2)</sup>そしてやはり「信念」に完結した自己の世界から、大衆の世界へ「下降」することによって、大衆との関係を成立させるという「啓蒙」のスタイルを変えることはなかったのである。

このように考えてくると、陳独秀は真の意味における、西欧近代の論理によって精神形成を行った、「近代人」であったと言えることができる。彼は中国における変革の思想としての啓蒙思想の破綻に気がつくのは早く、その危機をマルクス主義によってきりぬけたが、啓蒙思想の論理によって形成された自我意識の変革にまでは手をつけることはできなかったのである。毛沢東が整風運動で変革の対象としたのは、思想そのものの内容と言うよりも、この陳独秀が示しているような人間の意識の構造であった。<sup>(3)</sup>それは、その後「ブルジョア思想」として何度も批判の俎上に乗せられるのである。

これまで主に啓蒙思想家としこの陳独秀の理論と意識とを分析し、その後の事に若干言及してきたが、この思想家としての陳独秀の運命は、同時に中国における近代文学の運命をも暗示していると考えられる。中国の近代文学が、その文学的内容を十全に展開する以前に、陳独秀という思想家は、近代文学がよって立つ基盤となる思想の運命を十分に示してくれたのである。中国の近代文学が陳独秀の示したものより以上に豊かな内容を展開し得たかどうか。この問題は稿を改めて論じなければならない性質の問題である。

(79・12・17)

註

新文化運動までの陳独秀

- (1) 陳萬雄著「新文化運動前的陳独秀」中文大学出版社、(香港)一九七九年版、一頁。
- (2) 松本英紀『「新文化運動」における陳独秀の儒教批判』、立命館文学、二九九号、二三頁。
- (3) 「陳独秀自伝」(現代出版公司印行、一九六九年)、二五頁。
- (4) 前同、二四―二五頁。
- (5) 前同、二四―二八頁。
- (6) 前同、三三―四一頁。
- (7) 陳独秀「駁康有為改統統理書」、「新青年」第二卷第二号。
- (8) (1)に同じ、七頁。
- (9) 前同、五頁。
- (10) 邛玉汝編著「陳独秀年譜」、龍門書店、(一九七四年)も、この頃については殆ど何も記載していない。五一―六頁。
- (11) 陳独秀「孔子之道与現代生活」、独秀文存(4)、一一―三頁。
- (12) (1)に同じ、二四頁。
- (13) (1)に同じ、二四頁。
- (14) (1)に同じ、二六頁。
- (15) (1)に同じ、二七―二八頁。
- (16) 「蘇報」、一九〇三年五月二十五日号

この資料は中島長文氏、「陳独秀年譜長編、初稿」、(一)、(二)、(三)、(京都産業大学論集)に蒐集されている分を利用して頂いた。

- (17) 「蘇報」、一九〇三年五月二十八日号、(前に同じ)。  
 (18) (1)に同じ、三〇頁。  
 (19) (1)に同じ、三五頁。  
 (20) (2)に同じ、二八頁。  
 (21) 堂恒芳「記安慶岳王会」、辛亥革命回憶録第四集、16に同じ。  
 (22) 沈寂「辛亥革命時期的岳王会」、歴史研究、一九七九年、第十期。  
 (23) (1)に同じ、三八―四五頁。  
 (24) 政協安徽省委員会文史資料工作組、「辛亥前安徽文教界的革命活動」、辛亥革命回憶録、第四集、16に同じ。  
 (25) (1)に同じ、四八頁。  
 (26) 前同、六五―六七頁。  
 (27) 21、24の二つの資料による。  
 (28) (2)に同じ。  
 (29) (1)に同じ、六九頁。  
 (30) 前同、七八―七九頁。  
 (31) 陳独秀の留学については中島長文氏が、前掲論文の(二)で詳しい考証を行っておられる。これによると正則英語学校とアテネ・フランセの可能性が強いということである。フランス留学の可能性はないという事である。今回は正則英語学校で学んだらしい。  
 (32) 陳独秀の学問の傾向が劉師培、章炳麟の学風と似ているという指摘がある。(前掲、松本論文、三〇頁)。  
 (33) (1)に同じ、九二頁。  
 (34) 陸軍小学校教師になった時期には諸説があつて一定しないが、一〇年とする「年譜」の説が前後の關係から考えれば、妥当だと思われる。  
 (35) 前掲「年譜」による。二〇頁。  
 (36) 前同、二二頁。  
 (37) (1)に同じ、一九九―二〇二頁。  
 (38) 前同、一〇一―一〇二頁。  
 (39) 前同、一〇二―一〇三頁。
- 啓蒙の意識と論理
- (2) (1) 陳独秀「生機」、(甲寅、一卷第二号)。  
 陳独秀「愛国、心與自党心」、(甲寅、一卷第四号)。

- (3) 丸山松幸「陳独秀と李大劍」、「近代中国の思想と文学」、(六一—六四頁)や新島淳郎「五四時代の陳独秀の思想」、(思想一九五六年二月号)、などが代表的論文である。  
(1)に同じ。
- (4) 「新青年」、第一卷第四号。
- (5) 陳独秀「一九一六年」、「新青年」、第一卷第五号。
- (6) 陳独秀「東西民族の根本思想の相異」、新青年、第一卷第四号。
- (7) 陳独秀「今日之教育方針」、「新青年」、第一卷第二号。
- (8) 前同。
- (9) 陳独秀「本誌罪案之答弁書」、「新青年」、第六卷第一号。
- (10) 陳独秀「敬告青年」、「新青年」、第一卷第一号。
- (11) B・I シュウオルツ著「中国近代化と知識人」、東京大学出版会、九五—一一〇頁。
- (12) 平野健一郎訳
- (13) 陳独秀「吾人最後之覚悟」、新青年、第一卷第六号。
- 啓蒙的論理の機能
- (1) 「通信」、「新青年」、第二期第三号。
- (2) 巴金著「家」、岩波文庫、五〇—五一頁。
- (3) 飯塚朗訳「近代化路線」にそつて「科学」と「民主」は現在再評価されているか、これにつれて陳独秀も一定の役割を評価されるようになった。次のような論文がある。
- 「建党初期の陳独秀」、「論五四」時代の百家争鳴、(歴史研究、一九七九年四期)。
- 「論五四」時代の反封建思想革命、「陳独秀和「新青年」」、(歴史研究、一九七九年五期)。
- 「從五四」以後文学流派的形成和發展想到的、(文芸報、一九七九年第五号)。
- 「論五四」時代の社会思潮、(哲学研究、一九七九年第五期)。
- 「論五四」新文化運動中の民主和科学、(哲学研究、一九七九年第六期)。
- 「五四」時期的民主和科学思潮、「五四」文学革命精神的啓示、(紅旗、一九七九年第五期)。
- 陳独秀「駁康有為共和平議」、「新青年」、第四期第三号。
- 陳独秀「今日中国之政治問題」、「新青年」、第五卷第一号。
- 陳独秀「克林德碑」、「新青年」、第五卷第五号。

- (8) 陳独秀「学生界應該排斥的日貨」、「新青年」、第七卷第十二号。
- (9) 〃
- (10) 義和団の評価については、里井彦七郎「近代中国における民衆運動とその思想」、(東京大学出版会)、を参照のこと。

啓蒙思想家の意識構造

- (1) このような例として典型的なものは「天賦人權論」である。ルソー・ヒュームなどにも見られるように「先天的な人間の権利」という事を啓蒙思想は出発点としている。
- (2) 陳独秀の「転向」については、第一次世界大戦とこれに続くヴェルサイユ条約で、自己の描く「図式」が破綻したことが決定的契機となっている。自己の生活上の感受というものはあまり大きな作用を及ぼしていない。
- (3) 毛沢東は整風の対象として「老八股」とともに「五四」以後に形成された「洋八股」をもあげている。「反对党八股」、(選集、第三卷)、八三二頁。